

「後期幕府直轄時代について(4)」

安政元年(1854)3月、アメリカ合衆国と江戸幕府との間で日米和親条約(箱館・下田の開港)が締結され、同年8月には、日露和親条約(箱館・下田・長崎の開港)が締結されました。

日英和親条約の締結

イギリス東インド・中国艦隊司令長官スターリングは、ロシア艦隊を追って、安政元年閏7月(7月が2回あり、7月の次が閏7月となる)15日に軍艦4隻を率いて長崎に入港し、書を長崎奉行に送り、クリミア戦争でのロシアとの開戦を告げ、さらにロシアが樺太と千島列島への領土的野心のあることを警告し、幕府に対しては中立的な立場の

の支配権をめぐって、イギリス・フランスなど4箇国連合とロシアが戦う、クリミア戦争(1853~1856)が勃発し、ロシアとイギリスが戦闘状態になっていました。今回は日英和親条約の締結と、日露和親条約締結に至るロシア使節プチャーチンの動向とロシア船ディアナ号の遭難事件を見て行きます。

薪水食料補給のための開港を求めました。

長崎奉行は幕府に許可をもとめ、8月23日に大方日米和親条約に準じた条約が調印され、薪水食料の供給や破船の修理のため箱館・長崎の開港を許し、長崎は即時、箱館開港はイギリス船が長崎を出航した日から50日後と決められました。

ロシア使節の動向

ロシア使節プチャーチン

は、嘉永6年(1853)7月、日露和親条約を結ぶと長崎に来港しましたが、8月に一時帰国します。

その後再び、安政元年(1854)8月にディアナ号(約500人乗船)で箱館に来航し、薪水食料を求めました。さらに、プチャーチンは、条約締結のため江戸行きを請うので、箱館奉行は大坂で告示がある旨を示しました。そこで、大坂に赴くと、幕府から下田で応接するので下田に行くようにと通告されました。10月15日に下田港に入ったところ、11月4日大津波にあり、乗船が大破したので修理しようとして戸田に回航している時に、ディアナ号は沈没してしまいます。

日本で初めて造られた西洋式帆船

プチャーチンは、幕府に造船の許可を得て、豆州君澤郡戸田村(現静岡県沼津市戸田)で、帰国のための代船を建造することにしました。この時、日本で初め

ての西洋型の造船技術が伝えられることになり、ロシア人技術者の設計・指導により、近郊や江戸からも優秀な船大工や鍛冶を呼び、金具の製作や塗装まで、全てを現地で行ったので、技術習得の成果が大きかったとされています。

この造船作業は昼夜を問わず行われたので、80日余で完成しました。この船は、二本マストで60人乗りのスクーナー船と呼ばれる木造帆船で、長さ約25m、幅約7mあり、竜骨(キール)の長さは約19mあったとされています。

軍艦には不向きでしたが、高性能を生かした貨物輸送に適していたので、幕府はこの船型を「君澤型」と称することにし、その後何隻も建造されました。

この新造船は、プチャーチンにより、建造地の住民への感謝をこめて「ヘダ号」と名付けられました。

日露和親条約

日露の国境について、千

島列島では択捉島と得撫島の間とし、択捉全島を日本に属し、得撫全島からさらにクリル諸島をロシアに属すとし、樺太については日本とロシアの間に境を持たずこれまで通りとし、国境以外については、日米・日英の和親条約とほぼ共通し、箱館・下田・長崎の開港を許し、12月21日に調印が成立しました。

ロシア人の帰還

安政2年(1855)正月、ロシア兵105人はアメリカ船に乗ってカムチャツカに帰還し、プチャーチンは竣工した「ヘダ号」に乗って、3月22日に退帆しました。しかし、乗れなかった270人は、ドイツ商船を雇い6月に出帆しましたが、カムチャツカでイギリス艦隊に拿捕され、全員捕虜となつてしまいました。また、ロシア政府はこの厚意に感謝し、修理のために回航する際下田で降ろされたディアナ号の大砲52門が日本に寄贈されました。